

## 史料紹介と研究

# 東京大学史料編纂所蔵明治天皇宸筆勅書の料紙調査報告

箱石 大・高島 晶彦・渋谷 綾子

## 1 維新期の明治天皇宸筆勅書とその料紙

### 1 料紙調査の概要

二〇二一年七月二十日、東京大学史料編纂所（以下、本所と略記）において、本所所蔵明治天皇宸筆勅書（図書登録名：「明治天皇宸翰御沙汰書」、請求記号：S〇四七一・四、巻頭図版参照）の料紙を対象とし、精密な法量の計測と表面観察、顕微鏡を使用した観察・撮影記録に基づく構成物分析を内容とする調査を実施した。調査参加者は、箱石、高島、渋谷、水上たかね（本所助教）、天野真志（国立歴史民俗博物館特任准教授）、白石烈（宮内庁書陵部主任研究官）の六名である。なお、本調査報告は、一を箱石、二を高島、三を渋谷が分担して執筆した。

### 2 東京大学史料編纂所蔵「明治天皇宸翰御沙汰書」

明治二年（一八六九）四月四日、明治天皇は、六国史以後断絶していた修史事業を担当する「史局」を開設し、当時、行政官輔相という維新政府で最上位の職にあった三条実美を「総裁」職に任命した。その際、三条に下賜された文書が明治天皇宸筆勅書である。維新政府の修史事業を継承する本所にとって、この三条実美宛明治天皇宸筆勅書は、自らの歴史を語る重要な史料とされてきたが、もともとは三条公爵家に伝来し、昭和二十五年（一九五〇）に三条家から本所へ寄贈されたものである（紙面に捺された篆書体・陽刻の「三條之印」という印文の朱方印は、旧蔵者の三条家で使用された蔵書印）。現在は「明治天皇宸翰御沙汰書」という登録名の貴重書として管理さ

れている。

### 3 維新期における明治天皇宸筆勅書の特徴

明治四年（一八七一）の廃藩置県までに発給された明治天皇宸筆勅書について、現時点で存在を確認できた十通を検討した結果、宛先は、有栖川宮熈仁親王・仁和寺宮嘉彰親王・静寛院宮親子内親王（和宮）らの宮（皇族）、公家出身で政府高官の三条実美・岩倉具視、有力藩である長州・薩摩両藩の毛利敬親・島津久光らに限られた政治的にも特別な文書であることが明らかとなっている。本所所蔵明治天皇宸筆勅書も、三条個人に宛てて下された特別な文書であり、『太政官日誌』といった官版日誌に掲載して公表されることもなかった。

明治天皇宸筆勅書の文面には、いずれも日付・差出書・宛所が記されず、慶応四〇明治元年（一八六八）分の文体は候文であったが、明治二年以降はほぼ漢字・片仮名交じりの漢文訓読体となっている。

本所所蔵宸筆勅書以外は原本を調査できていないが、写真画像で確認する限り、料紙の形式は、慶応四〇明治元年における切紙と折紙が混在する状況を経て、明治二年以降はほとんど折紙の形式へと変遷していることが確認される。本所所蔵宸筆勅書の料紙は上質の奉書紙と判断したが、他の宸筆勅書の料紙については「備中檀紙」と明記した記録もある。

ところで、本所では、文書名を「明治天皇宸翰御沙汰書」としているが、同時代の御沙汰書とは明らかに異なる文書様式であり、後年、『法規分類大全』を編纂・刊行した明治政府の内閣記録局では、類似の文書を勅（勅書）と定義している。しかしながら、古代・中世・近世の天皇文書を通時的にみた歴史学者たちは、近世の御沙汰書系統の文書様式と判断してきた。これも一つの学問的見識であり尊重すべきものと考えられる。

### 4 料紙調査の成果

二〇一九年、箱石と高島は、今回の調査に先立って、本所所蔵明治天皇宸

筆勅書の原本熟覧調査を実施している。

このとき原本を熟覧した結果、その料紙は上質の奉書紙であり、本紙に付属している包紙もほぼ共紙であると判断した。本紙は折紙の形式で、元来は四つ折にして包紙に収納されていたと考えられる折り跡も確認できた。

本紙には、料紙の端の間際まで文字が書き付けられ、筆画の一部が料紙の端からはみ出している箇所も存在する。これが、当時数え年で十八歳（この時点では満十六歳）であった明治天皇の筆跡である。一見すると料紙の周囲が後に裁断されているようにも思われるが、料紙の端を熟覧したところ、この時点まで額に納められていたのではあるが、恐らく裁断はされていないだろうと判断した。こうした知見から、料紙の端ぎりぎりのところまで筆を走らせるのが明治天皇の書き癖であり、傍らに案文を置き、それを手本として文字だけでなく字配りもその通りに清書したため、とくに字配りが非常に窮屈なものとなってしまったのではないかと推測した。

今回の調査は、二〇一九年実施の原本熟覧調査に基づく観察結果を、改めて再検証しようとするものである。料紙の精密な計測・観察と構成物分析の結果については、二・三で詳述するが、経験的・主観的な判断ではなく、科学的な調査に基づき、本所所蔵明治天皇宸筆勅書の料紙の種類が奉書紙であり、本紙と包紙は共紙であることが客観的に実証されたと考えている。この調査は、表装や裏打ちなどの修補がなされていなかったために可能となった訳であるが、この結果、本所所蔵明治天皇宸筆勅書の現存する包紙は、宸筆勅書を受け取った三条側が後から補ったものではなく、伝来の過程で後から補われたものでもないことが明確になったように思われる。これにより、三条宛の宸筆勅書は、当初からウワ書きのない包紙に収納して発給されていたことが再確認できた。維新时期における他の明治天皇宸筆勅書も、本紙に日付・差出書・宛所が記されないのはもちろんであるが、包紙にも一切ウワ書きされることなく発給されている可能性が高くなったと言えるだろう。

また、本紙と包紙の縦寸法・厚さ・重量にほとんど差はなく、包紙の横寸法が一・五cm短いだけであり、これは本紙を包紙に収納した際に調整の必要

から裁断したために生じた違いだということである。このような計測・観察結果から考えても、本紙・包紙いずれもが後年さらに裁断された可能性は極めて低いと思われる。したがって、本紙の字配りが窮屈に見えるのは、料紙の周囲が裁断されたからなのではなく、もともと字配りがそうであったと判断してよいのではなからうか。

今回の調査結果は、現存する他の明治天皇宸筆勅書のみならず、維新政府発給文書全般の料紙調査を今後実施していく上で、基準とすべき重要な基礎データとなるのではないかと考えている。

## 二 料紙の計測・観察

### 1 法量データにみる本紙・包紙

本紙および包紙の縦横寸法、厚さ、重量、密度（体密度）、坪量（面密度）は以下の通りである（表1参照）。

このように本紙と包紙の縦寸法・厚さ・重量には差はほとんどないが、横寸法が一・五cm短い。これは、包紙をたたみ終えたとき、紙の縁が折り目に合うようにする。その際に、折りたたむことで生じる厚み分（本紙の厚みと折り重ね分）を調整しなければならず、ある程度の寸法をひかえる必要がある。したがってこの包紙の横寸法は1cm程度短いのである。

	本紙	包紙
縦 (cm)	32.6	32.8
横 (cm)	46.6	45.1
厚さ (mm)	0.19	0.19
重量 (g)	8.3	8.5
密度 (g/cm <sup>3</sup> )	0.29	0.3
坪量 (g/m <sup>2</sup> )	54.64	57.46

表1 法量データ

### 2 表面観察による外見的特徴

本紙および包紙の外見的特徴は以下の通りである（表2参照）。

本紙・包紙ともに、地合いは細やかな繊維が緻密に重なり合っていて、斑がほとんどなく、樹皮片もほとんど見受けられない。

地色は白で、経年変化により黄味を帯びている。

	本紙	包紙
繊維束	ほとんどなし	極僅か
異物	樹皮片：ほとんどなし	樹皮片：ほとんどなし
地合い	斑：ほとんどなし	斑：ほとんどなし
硬さ	柔らかい	柔らかい
地色	白黄	白黄
簀目の本数	25	25
糸目の幅 (mm)	25	30
板目	不可視	不可視
刷毛目	裏・顕著	裏・顕著
受棧本数	3	3
受棧の間隔 (mm)	113	110
備考	表面滑らか	表面滑らか
	光沢なし	光沢なし

表2 表面観察による外見的特徴

一寸(三・〇三cm) 当たりの簀目の本数(漉簀のひごの目数)は、見えにくいが一五本と細かい。

受棧とは紙漉道具で、紙料を汲み込むための桁(けた)の内側天地方向に差し込まれた簀を支えるための棧のことである。抄紙の際、棧が漉簀に触れることにより、その太さの繊維がのるのである。そのため、極稀ではあるが透過光下での観察で見ることができ(図1～3の包紙表、本

紙表・裏の透過光画像を参照)。

受棧の本数は本紙・包紙ともに三本で、間隔は本紙が一三mm、包紙が一〇mmで、その差はほとんどない。

本紙・包紙ともに、板目は見えないが、土壁のような滑らかな面を形成している。刷毛目は強く顕著に見受けられるので、木目のほとんどない平滑な乾燥板に張り付けられたものと考えられる。

### 3 小型顕微鏡での観察

一〇〇倍率の小型顕微鏡(SUGITOU製ミクロメータスコープ)と有機ELパネルを用いた透過光観察の結果は以下の通りである。

繊維の種類は楮で、填料として米粉を多く含んでいる。非繊維物質は微量含

んでおり、抄紙過程においてよく水洗いされた紙であると判断した。以上の考察から、本紙と包紙は、ほぼ同種の紙であると考えられる。また、富田正弘氏が示す奉書の基準データ(表3)に、ほぼ合致することから、この料紙は奉書紙であると考えられる。

### 三 料紙の構成物分析

#### 1 調査方法

今回の調査は包紙表、本紙表と裏を対象とし(図1～3)、料紙の構成物分析の基本項目に則って実施した。この分析項目は、史料自体の基本情報とともに、顕微鏡撮影画像の撮影倍率や撮影箇所等の記述情報、料紙の構成物の種類・量・密度とそれらの同定結果、植物学的特徴にもとづく構成物の識別基準を盛り込んでいる。調査で使用した顕微鏡は、デジタルマイクロスコープDino-lite R&D(研究開発)セット(二二〇倍と四五〇倍の二台)、Dino-Lite Premier M Fluorescence(蛍光)TCFVW(以下、蛍光顕微鏡)、顕微鏡用偏光歪検査セット(バックライト)である。マイクロスコープ本体と顕微鏡用偏光歪検査セットの双方に偏光ポライザーを装着し、デンプン粒と、柔細胞や鈎物など他の物質を明確に識別できるようにしている。顕微鏡観察では基本的に二二〇倍のレンズを用いて透過光で観察を行い、填料の米粉に由来するイネのデンプン粒など特徴的な構成物が確認できる場合は四五〇倍のレンズを用いた。あわせて、繊維、柔細胞などの非繊維物質、鈎物の種類の特定とそれらの含有状況を観察するため、蛍光顕微鏡を使用した。

#### 2 包紙表

包紙表(図1)については、二二〇倍・透過光(偏光ポライザーを使

繊維	楮
時代	江戸
高	33cm以上
厚	0.2mm程
密度	0.34程
色	白
硬さ	やや柔らかい
紙面	平滑：肌理細かい
填料	米粉(多)
繊維束	ほとんどなし
不純物	ほとんどなし

表3 奉書データ

用、**図1(1)**と二二〇倍・蛍光（反射光による撮影と同じ効果が得られるシアン色蛍光と白色LEDを設定、**図1(2)**）を用いて、六箇所を選択して観察し、撮影記録を行った。**図1(1)**では、画像内でイネのデンプン粒一二〇個（六角形、粒径範囲三、三八四〜八、四五九 $\mu\text{m}$ ）と細胞組織断片七片を確認した。これらのデンプン粒は本紙と同様、繊維に絡みついて凝集していた。**図1(2)**では、イネのデンプン粒一個（粒径範囲三、三六六〜九、〇六四 $\mu\text{m}$ ）、細胞組織断片一六片、繊維断片三片が見られた。イネのデンプン粒はすべて填料の米粉に由来すると考える。

### 3 本紙表

本紙表（**図2**）については、二二〇倍・透過光（**図2(1)**）と二二〇倍・蛍光（**図2(2)**）を用いて、料紙表面の六箇所を任意で選択して観察し、撮影記録を行った。**図2(1)**では、画像内でイネのデンプン粒九八個（六角形、粒径範囲五、〇七一〜一〇、一四一 $\mu\text{m}$ ）と細胞組織の断片一片（植物のどの部位かは不明）を確認、**図2(2)**では、イネのデンプン粒一六個（六角形、粒径範囲三、三六六〜八、四一六 $\mu\text{m}$ ）と細胞組織断片二九片を確認した。

### 4 本紙裏

本紙裏（**図3**）については、紙色の濃い箇所および一紙の中央部を対象とし、二二〇倍・透過光（**図3(1)**）と四五〇倍・透過光（**図3(2)**）による料紙表面の観察と撮影記録を行った。本紙表と異なり、対象箇所をしばらくこんだ理由は、紙色の差異が構成物の種類や量に起因するのかわ調べるためである。抄紙の折に紙の中央部へ填料が集中し、水洗いで紙の裏側に抜けて溜った結果、色の違いとして表れているのではないかと推定された。分析の結果、本紙表よりも多量のイネのデンプン粒が含まれていることが判明した。**図3(1)**では、繊維に絡みつき凝集したイネのデンプン粒四二個（六角形、粒径範囲三、三八八〜八、四七〇 $\mu\text{m}$ ）と細胞組織断片五片を確認した。一紙の中央部付近（**図3(2)**）を二二〇倍で観察したところ大量のデンプン粒が見られた

め、四五〇倍を用いた。結果として、イネのデンプン粒一二九個（六角形、粒径範囲三、二六五〜八、八九〇 $\mu\text{m}$ ）と細胞組織断片七片を確認した。さらに、これらのデンプン粒には偏光十字<sup>(6)</sup>が確認できるものも見られた（**図3(2)** a・b）。

### 5 分析結果

**図1**に示したように、本紙と包紙は大きさが異なるものの、實の目が本紙・包紙で接続することが確認でき、同じ一枚の紙を裁断したと判明した。さらに料紙の構成物分析によって、本紙と包紙のイネのデンプン粒や細胞組織・繊維の断片がいずれも形態学的特徴が類似し、含有量も同程度であることが確認された。これらの結果をふまえると、本紙・包紙ともに同じ一枚の紙を使用していると考ええる。

### 註

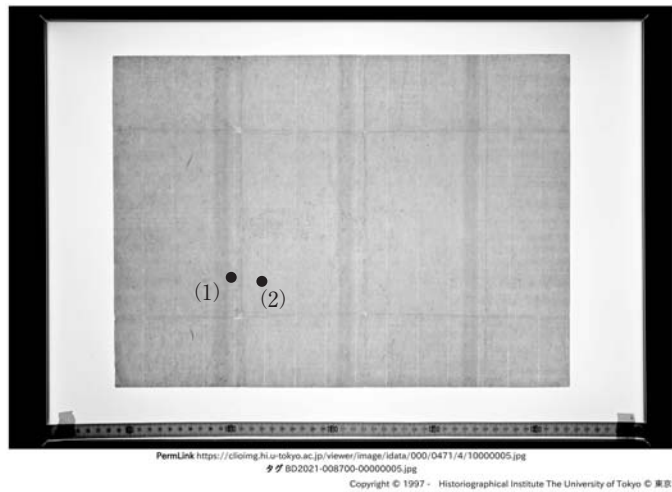
- (1) 以下、本所所蔵の明治天皇宸筆勅書については、箱石大「明治太政官文書研究からみた「宸翰御沙汰書」」（東京大学史料編纂所研究紀要）第三一〇号、二〇二一年による。
- (2) 前掲註1箱石論文、二六八頁。
- (3) 富田正弘「日本における文書料紙の概観」（企画展示図録「中世の古文書 機能と形」国立歴史民俗博物館、二〇一三年）。
- (4) 渋谷綾子・野村朋弘・高島晶彦・天野真志・山田太造「考古学・植物学を活用した松尾大社社蔵史料の料紙の構成物分析」（東京大学史料編纂所研究紀要）第三一〇号、二〇二一年。
- (5) 前掲註4。
- (6) 粒子の形成核（粒芯の中央部、ヘンリウム）で複屈折にともなう十字状の暗線。デンプン粒に特有の特徴である。

【付記】本調査は、JSPS科研費（JP19H01303）「明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築」（研究代表者：箱石大）、同（JP19H00549）「国際古文書料紙学」の確立」（研究代表者：渋谷綾子）の助成を受けたものである。

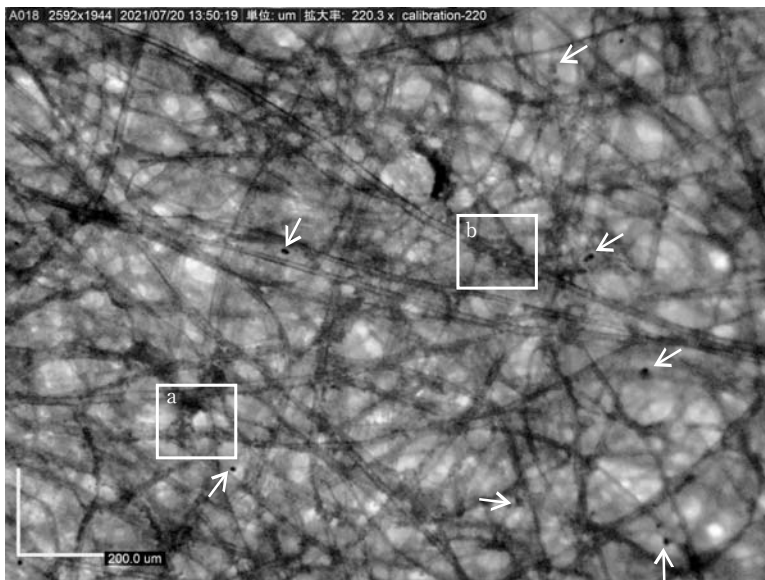
本紙と包紙の  
対応関係



包紙表 (透過光を用いた撮影、黒丸は撮影箇所を示す)



(1)220倍, 透過光 (偏光ポラライザーを使用)

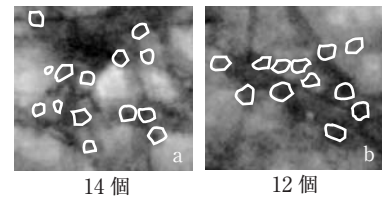


※ 顕微鏡画像データは下記で公開  
<<https://github.com/ashibuta/gazocenter-95.git>>

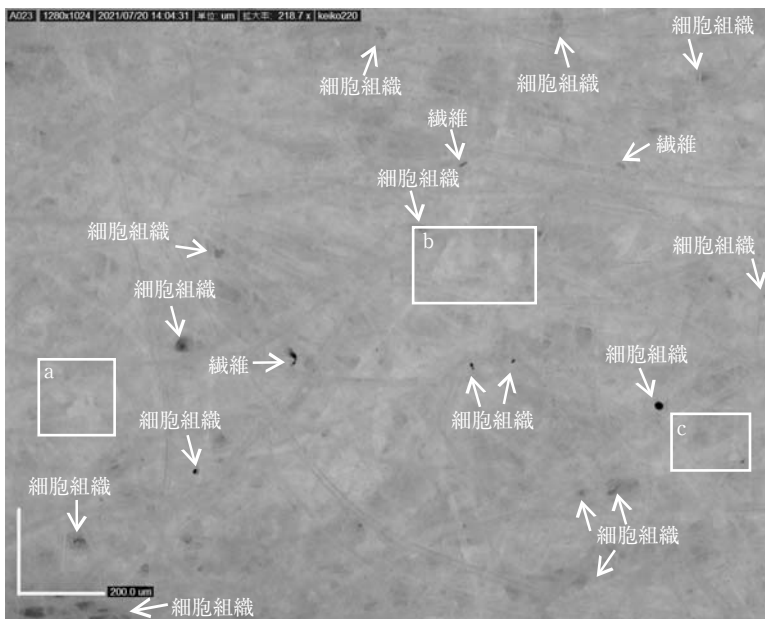
- ・料紙の左端から8cm、下から11.5cmにおける撮影
- ・画像内でイネのデンプン粒120個、細胞組織7片 (矢印) を確認

デンプン粒の例 (縮尺は任意)

- ・白囲みは粒子の輪郭を示す
- ・粒径範囲 3.384 ~ 8.459 μm
- ・凝集箇所は粒子同士が密に重なる



(2)220倍, 蛍光 (シアン色蛍光+白色LEDを設定)



- ・料紙の左端から11cm、下から10.5cmにおける撮影
- ・画像内でイネのデンプン粒11個、細胞組織16片、繊維断片3片 (矢印) を確認

デンプン粒 (縮尺は任意)

- ・白囲みは粒子の輪郭を示す
- ・粒径範囲 3.366 ~ 9.064 μm

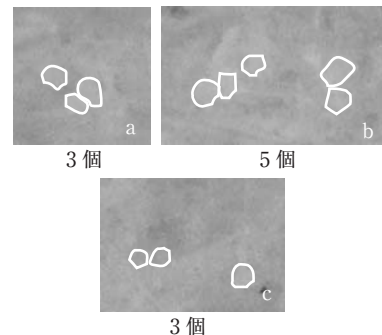
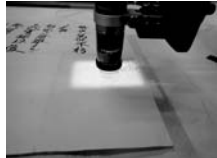


図1 本紙・包紙の対応関係と包紙表の顕微鏡撮影画像

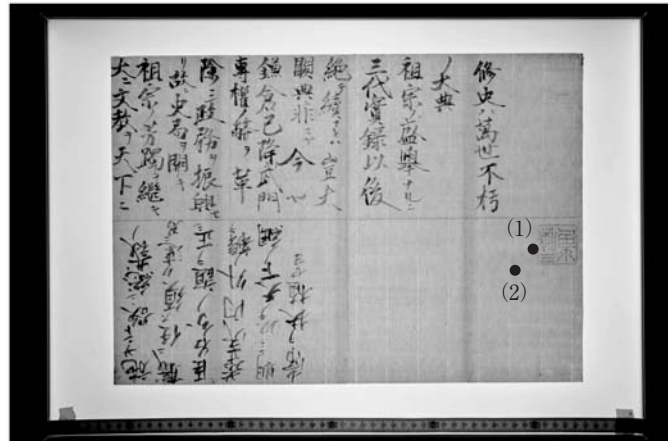


史料調査の様子

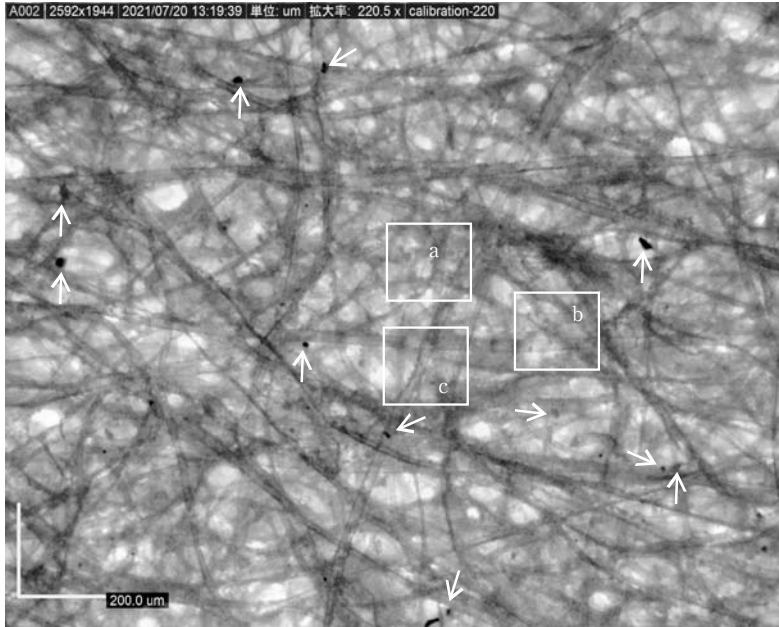


←顕微鏡撮影の様子

本紙表（透過光を用いた撮影、黒丸は撮影箇所を示す）

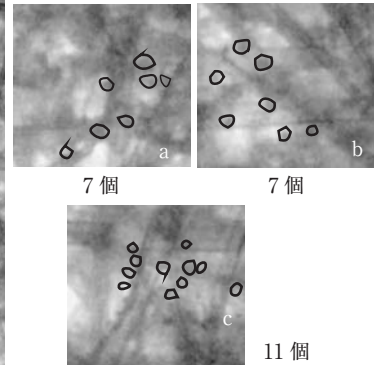


(1)220倍, 透過光 (偏光ポラライザーを使用)

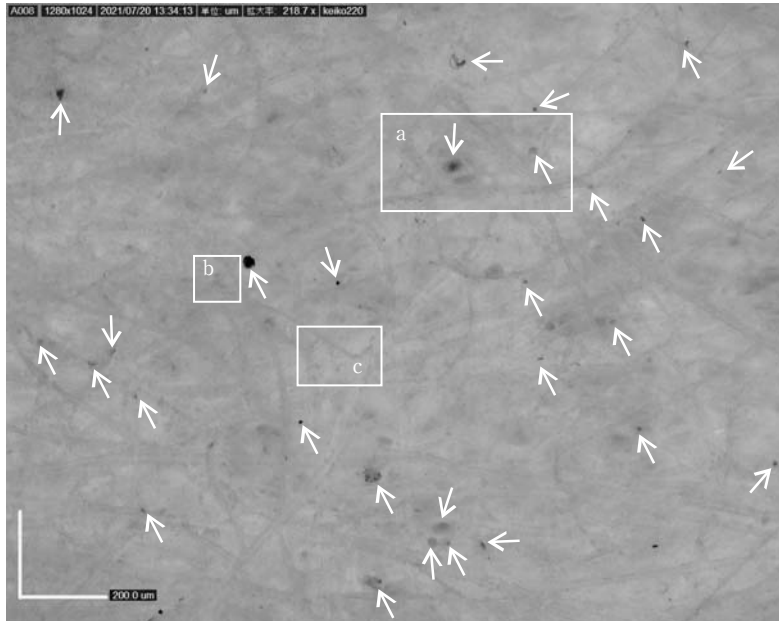


※ 顕微鏡画像データは下記で公開  
 <<https://github.com/ashibuta/gazocenter-95.git>>

- ・料紙の右端から5cm、下から10.7cmにおける撮影
  - ・画像内でイネのデンプン粒98個、細胞組織11片(矢印)を確認
- デンプン粒の例 (縮尺は任意)
- ・黒囲みは粒子の輪郭を示す
  - ・粒径範囲 5.071 ~ 10.141  $\mu\text{m}$



(2)220倍, 蛍光 (シアン色蛍光+白色LEDを設定)



- ・料紙の右端から7.5cm、下から9cmにおける撮影
  - ・画像内でイネのデンプン粒16個、細胞組織29片(矢印)を確認
- デンプン粒の例 (縮尺は任意)
- ・白囲みは粒子の輪郭を示す
  - ・粒径範囲 3.366 ~ 8.416  $\mu\text{m}$

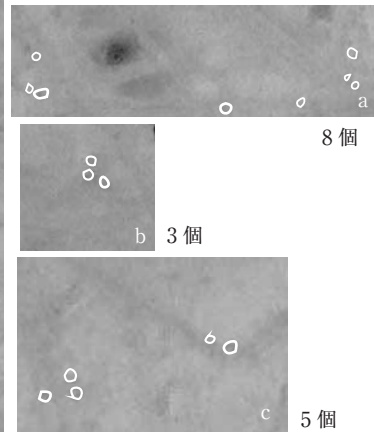
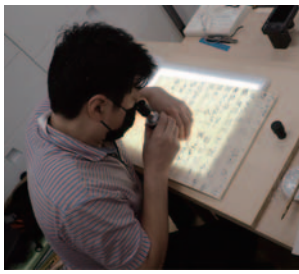


図2 史料調査・顕微鏡撮影の様子と本紙表の顕微鏡撮影画像



史料調査の様子



←顕微鏡撮影の様子

紙色の濃い箇所および一紙の中央部を対象に撮影

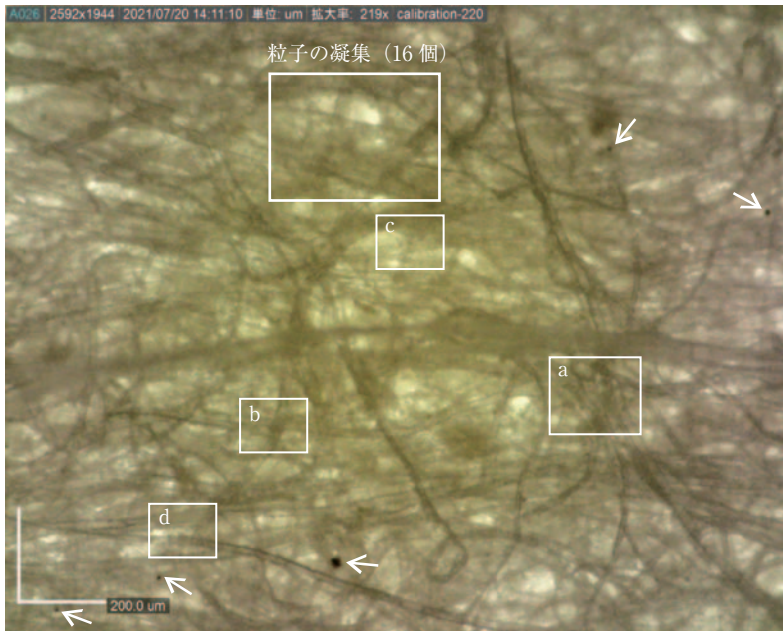
本紙裏（透過光を用いた撮影、黒丸は撮影箇所を示す）



PermLink <https://ci.oiimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/data/00/0471/4/10000023.jpg>  
タグ #02021-008700-00000023.jpg

Copyright © 1997 - Historiographical Institute The University of Tokyo © 東京大学

(1)220倍, 透過光 (偏光ポラライザーを使用)

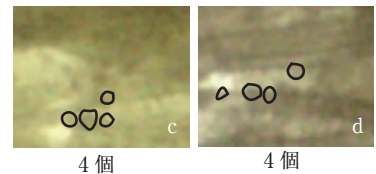
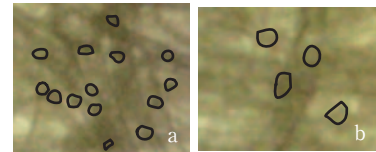


※ 顕微鏡画像データは下記で公開  
<<https://github.com/ashibuta/gazocenter-95.git>>

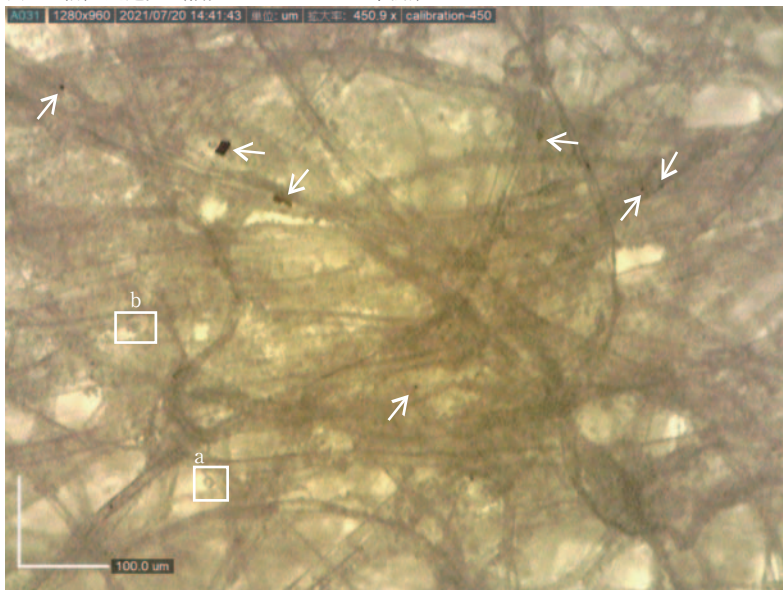
- ・ 料紙の右端から 22cm、下から 12cm における撮影
- ・ 画像内でイネのデンプン粒 42 個、細胞組織 5 片 (矢印) を確認

デンプン粒の例 (縮尺は任意)

- ・ 黒囲みは粒子の輪郭を示す
- ・ 粒径範囲 3.388 ~ 8.470 μm
- ・ 凝集箇所は粒子同士が密に重なる



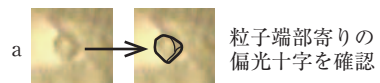
(2)450倍, 透過光 (偏光ポラライザーを使用)



- ・ 料紙の右端から 23cm、下から 12cm における撮影
- ・ 画像内でイネのデンプン粒 129 個、細胞組織 7 片 (矢印) を確認

デンプン粒の例 (縮尺は任意)

- ・ 繊維周辺の濃い箇所や粒状物質は、すべて繊維に密着し絡みついたデンプン粒の凝集
- ・ 粒径範囲 3.265 ~ 8.890 μm



六角形、縦径 4.082 μm・横径 8.890 μm



六角形、縦径 3.366 μm・横径 3.366 μm

図3 史料調査・顕微鏡撮影の様子と本紙裏の顕微鏡撮影画像